

保育者が潜在化するプロセス

—潜在保育士の後悔という感情に焦点を当てて—

香曾我部琢¹

¹ 宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では、保育者が保育施設に就職して、離職するまでの経験や出来事を明らかにすることで、保育者が潜在化するプロセスを明らかにする。そして、保育士が潜在化する要因について明らかにすることで、潜在化を予防する方策について検討を行う。具体的には、現在、潜在保育士として他の職種に就いている研究協力者にインタビューを実施し、言語データをサンプリングする。次に、言語データは定性データ分析ソフト(QDAソフト)を用いて概念を抽出する。最後に、抽出した概念を時系列に並べ、潜在化していくプロセスについて複線経路・等至性モデリング(TEM)を用いて図式化することで分析を行う。その結果、保育者の潜在化するプロセスにおいて、進路選択と就職活動の2つの分岐点が存在することが示された。とくに、高校から大学進学時の進路選択時において、保育者養成校に進学する以外に、他の進路の選択肢が分岐点として立ち上がってくる経験が示された。そして、分岐点での進路選択に対して後悔するネガティブな感情が、離職する際に、その後の就職活動に強く影響を与えることが示された。

キーワード: 潜在保育士、複線経路・等至性モデリング、進路選択、後悔

1. 問題と状況

見方も存在する。

1.1 新たな待機児童の顕在化

現代社会では、少子化の急激な進行を食い止めつつ、さらに女性の社会進出を高めるために、子育て世代のワークライフバランスを支援するための施策の一つとして、保育施設の増設が進められてきた。実際に、都市部では保育施設は増設され、受け入れ定員数も増加した。しかし、保育定員増に伴って逆に待機児童が増加するというパラドックス的な現象が起きている。

この現象が生じた原因について、先行研究では、保育サービスを受けられる定員数の増加によって、これまで保育施設に子どもを預けることをあきらめていた母親層に、保育施設に預けられるという期待感を与え、新たな待機児童を掘り起こしたと示している。また、一方では、2001年に待機児童の定義自体を変更し、認可外保育施設を利用していた児童を待機児童から除外していたため、これまで除外されていた待機児童が顕在化したという

1.2 保育士不足と離職率の高さ

さらなる待機児童の増加の対策として、新たな保育施設の増設が求められ、同時にそこで働く保育士の需要も高まった。そのため、ここ3年で、保育士の有効求人倍率(全国平均)は2012年の1.36倍から2.18倍(2015年)へと急増しており、保育士不足の問題は全国的な問題となっている。この保育士不足の直接的な背景として、池本(2015)[1]は(ア)保育士資格のハードルの高さ、(イ)資格を取得している人が保育職に就かない、就いても離職率が高く、その後保育職に就かない『潜在保育士』が多い、(ウ)保育を担う職員には資格保有者を100%配置する必要がある、以上3つの要因を示している。そして、資格保有者が保育職に就かない理由として、賃金の低さや休暇の取りにくさ、就業時間のミスマッチなどを要因として示している。

1.3 離職と再就職の連続性

先行研究では、離職の要因を対象とした研究は近年多くみられるが、離職後、その保育者がどのような人生を歩んだのか、保育職に戻らない『潜在保育士』を取り上げた研究はまだ少ない。さらに、そのほとんどが潜在保育士になった要因について焦点を当てており、潜在保育士が再就職した後の状況も含めて、そのキャリアを巨視的に離職から再就職までの保育者の経験をその連続性を捉えた研究はまだ無い。近年の生涯発達研究では、発達を右肩上がりに捉えようとする発達観が批判され、常に変動する社会の中で多方向性と多次元性を持ちながら発達が促されると捉えられ、その多様で複雑で個別的な発達の経路を理解する必要性が示唆されてきた（サトウ 2006[2]）。つまり、離職と再就職の経験の間にも多様で複雑な発達の経路が存在すると考えられ、2つの経験を切り離して研究対象とするのではなく、連続的な経験として捉える必要がある。

そこで、本研究では、変動をつづける現代社会において、保育者が離職し、他の職種に再就職して潜在化していく保育者の経験の連続性に着目し、潜在化する要因について明らかにする。

2. 研究方法

2.1 サンプルング方法と手続き

本研究では、一度保育職に就業し、離職した後、他の職種へ再就職して、その後も他職種で継続就業している経験を持つ者を研究対象とした。インタビューは、劉(2016)[3]の先行研究において示された「保育士の仕事をしてみたいと思わない理由」をもとに、その理由が生起した経験や出来事について半構造化インタビューを行った。

2.2 研究協力者

一度保育職へ就職したが、その後離職して他職種へ再就職した研究協力者4名と研究者がインタビューを3回実施した。現在の職種は、販売業2名、製造業1名、サービス業1名である。年齢は25～32歳。

2.3 言語データ分析方法と手続き

TEM とは、ヴァルシナー(Valsiner, 2001[4])が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性(Equifinality)概念と複線経路(Trajectory)概念を取り入れようと創案したもので、人間の成長を開放システムとして捉えることで、人が他者や自分を取り巻く社会的な状況に応じて異なる経路を選択し、多様な経路をたどりながら(複線経路概念)も、類似した結果に辿りつくという、等至性概念を用いて、人間の成長のプロセスの多様性を記述しようとした方法論的枠組みである(安田, 2015[5])。

具体的な手順としては、(1)定性データ分析ソフト「weftQDA」を用いてインタビューで得た言語データを切片化し、それぞれに見出しを作成した。次に、断片化したデータをいくつかのまとまりにした。次に、(2)weftQDA で作成したまとまりを時間的な経過に配慮しながら、時系列・各幼児別に配列してTEM図を作成した。さらに、(3)TEM図をもとにインタビューを再度実施し、潜在化プロセスにおいて生起した感情について明らかにし、TEM図に入れ込んだ。そして、(3)それぞれのまとまりにTEM用語の意味づけを行い、3回目のインタビューの中で研究協力者とともに精査を行った。

また、最終的には、(4)作成したTEM図をもとに、発生の三層モデル(TLMG)を用いて、潜在化プロセスにおける促進記号の発生などの実相についても明らかにすることを目指す。

3. 結果と考察

3.1 TEM用語の定義

TEMによる分析の結果、保育者の潜在化プロセスを明らかにすることができた(図1参照)。等至点などのTEM用語とそれぞれの定義を表1としてまとめた。研究協力者が保育者として勤務してから離職し、他の職業に就職するまでに「学生時代の就職活動」と「高校における進路選択」、「保育職を離職する」、以上3つの経験が分岐点となりことが示された。以下、3つの分岐点に着目してTEM図について説明し、考察を示す。

等至点(EFP)を『明朝体』、分岐点(BFP)と必須通過点(OPP)を《明朝体》、経験と出来事を「ゴシック体」、そこで生起した感情「明朝体太字」で示す。

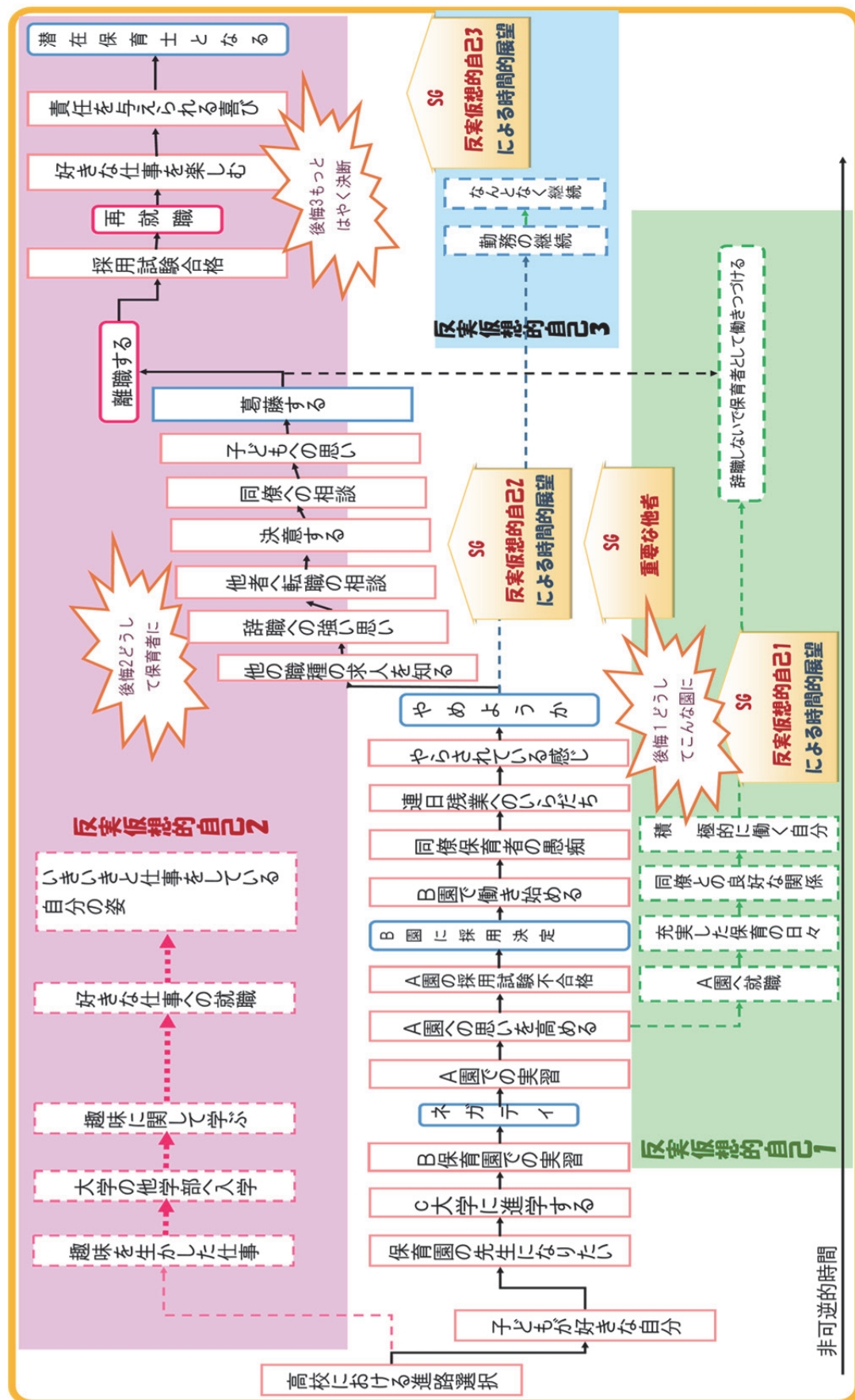


図1 潜在化プロセスのTEM図

3.2 自分の勤務園以外の園への思いを抱く

保育者が「勤務園で働き始める」と、就職しはじめたころは仕事に慣れようと一心不乱に仕事に取り組む日々が続く、しかし、しだいに余裕が出てくると「**同僚保育者の愚痴**」を聞くようになってくる。仕事には慣れてきたものの「**連日残業へのいらだち**」を感じながら働き続ける日々、はじめは楽しかった保育がしだいに「**やらされている感じ**」に変容し、今勤めている園をBFP《辞めようか》という思いが芽生え始めてくることが示された。

勤務してから離職への思いが芽生えるまでのこの時期、後悔1「**どうしてこんな園に就職しちゃったんだろう**」というネガティブな感情を生起させる。そして、過去の自らの就職活動を振り返り、もし当初希望していた「**A 園へ就職**」していたら「**充実した保育の日々**」を送りながら、「**同僚との良好な関係**」をもとに「**積極的に働く自分**」をイメージしていることが示された。

3.3 思い出される他職種への思い

B園を辞めようという思いが芽生え、日々の保育に追われている中で、他職種の就職を促す記号が生じる。例えば、新聞のチラシで「**他の職種の求人を知る**」ことで、さらにB園を辞めるだけでなく、保育職自体を辞めようとする「**辞職への強い思い**」を抱くようになる。すると、まずは両親や友人などの「**他者へ転職の相談**」をするようになり、離職へ「**決意**」を抱くと「**同僚に相談する**」ようになる。しかし、一方で担任している「**子どもへの思い**」を感じ、離職することにBFP《葛藤する》。

離職への思いが芽生えてから離職を決意するまでの時期、後悔2「**どうして保育者になっちゃったんだろう**」というネガティブな感情を抱くことが示された。そして、高校における進路選択の時期を思い出し、「**子どもが好き**」で保育者養成校の「**C 大学に進学する**」という選択肢だけでなく、自分の「**趣味を生かした仕事**」をしたいという思いから、「**大学の他学部へ入学する**」という選択肢があったことを示した。そして、大学では「**趣味に関して学ぶ**」ことで「**好きな仕事への就職**」を果たし、「**いきいきと仕事をしている自分の姿**」をイメージしていることが示された。

3.4 保育者を継続していることを想像する

葛藤しつつも、保育職に希望を見いだせなかった協力者は結局「**離職する**」ことを選択する。そして、ハローワークを通して求人を探し、採用試験を合格し、「**再就職**」を果たす。新たな職場では、「**好きな仕事を楽しむ**」ことで次第に仕事を覚えていく。そして、しばらくすると責任ある仕事を任されるようになり、「**責任を与えられる喜び**」を感じるようになる。そして、次第に保育職に対する思いを薄めて、潜在保育士として他職種で働き続けていくことが示された。

離職し、他職種で働くなかで充実感を得るなかで、保育者は離職することを後悔3「**もっとはやく決断しておけばよかった**」という感情を抱くようになる。そして、もしあのまま保育者として「**勤務を継続**」していたならば、日々、向上心もなく「**なんとなく仕事をする自分**」をイメージしていることが示された。

3.5 3つの後悔と反実仮想的自己

潜在保育士として生きる研究協力者の経験のプロセスの中で、3つの後悔の経験をしていることが示された。

まず、一つ目の後悔1は「**なぜ、B園になんて就職してしまったのか**」である。この後悔によって、養成校時代の就職活動が分岐点として立ち現れ、「**もし、他の園に勤めていたらもっとちがった人生があったのではないか**」というキャリア像が研究協力者にイメージが形成されたことが示された。

次に、二つ目の後悔2は「**なぜ、保育者になんてなってしまったのか**」である。この後悔によって、高校における進路選択の経験が分岐点として立ち現れた。そして、この後悔によって、「**もし、保育者ではなく、服飾関係の仕事に就いていたらもっと充実して働く自分**」という想像のキャリア像が協力者の中に構成されたことが示された。

最後に、三つ目の後悔3は「**葛藤しないで、もっとはやく離職を決断すればよかった**」という後悔である。この後悔によって、「**もし、離職しないで保育者として働き続けていたら、何となく仕事をしている自分**」というキャリア像がイメージされていることが示された。

以上のように、3つの後悔という感情が生じたことによって、その原因となった過去の経験を分岐点として立ち現わせて、それ以降のキャリアについて反実仮想的な自己像を生み出したことが示された。本研究では、このように分岐点において、現実の自分とは異なる選択肢を仮想化した自分の姿を「反実仮想的自己」と定義する。

そして、あくまでも想像にすぎなかった反実仮想的自己1と2に対して、次第に、現実の自分を重ねていくことで反実仮想的自己によって時間的展望を生み出すことが示された。そして、時間的展望を強めることでさらに反実仮想的自己を現実にしようと前向きに・積極的に行動し始めたことが明らかにされ、社会的ガイド(SG)として示された。さらに、反実仮想的自己2では、母親や同僚などの「重要な他者」との相互作用による後押しも社会的ガイド(SG)となり、反実仮想的自己2の実現を目指す行動をより強めていったことが明示された。

3.5 後悔と異時間混交によるゾーンの拡大

研究協力者は、自分が離職と他業種への再就職という大きな選択をする際に、「もし、自分が高校生

の進路選択のときに、自分の趣味を生かした仕事を選択していたら」という後悔が立ち現れたことを示した。そして、その後悔によって生み出された反実仮想的自己2へのより具体的なイメージが時間的展望へ強く影響を与え、その実現に向けてSGになったことを示した。

先に示したように、この離職・再就職へと強く誘ったのは、「B園の保育者になったことへの後悔」である。「他職種の求人を知る」ことが促進記号(PS)となり、保育職という枠にとらわれないで自分にとって「最善の職業とは何か?」と自問し始める。この出来事をきっかけに、今、現実世界に生きる自分の声(R-TEM)と、反実仮想的自己1の声(P-1TEM)、反実仮想的自己2の声(P-2TEM)、これらの異質な時間の自分の声が混交すること(=異時間混交)によって新たに歴史発達のゾーンが形成されたことが示された。異時間混交によって協力者の時間的展望に「他業種に再就職する」という新たな等至点が立ち上がり、ZOF(等至点の幅)が拡大したことで、P-2TEMがR-TEMにすり替わり、新たなゾーンへと発達の幅を拡大させたと考えられる(図2参照)。

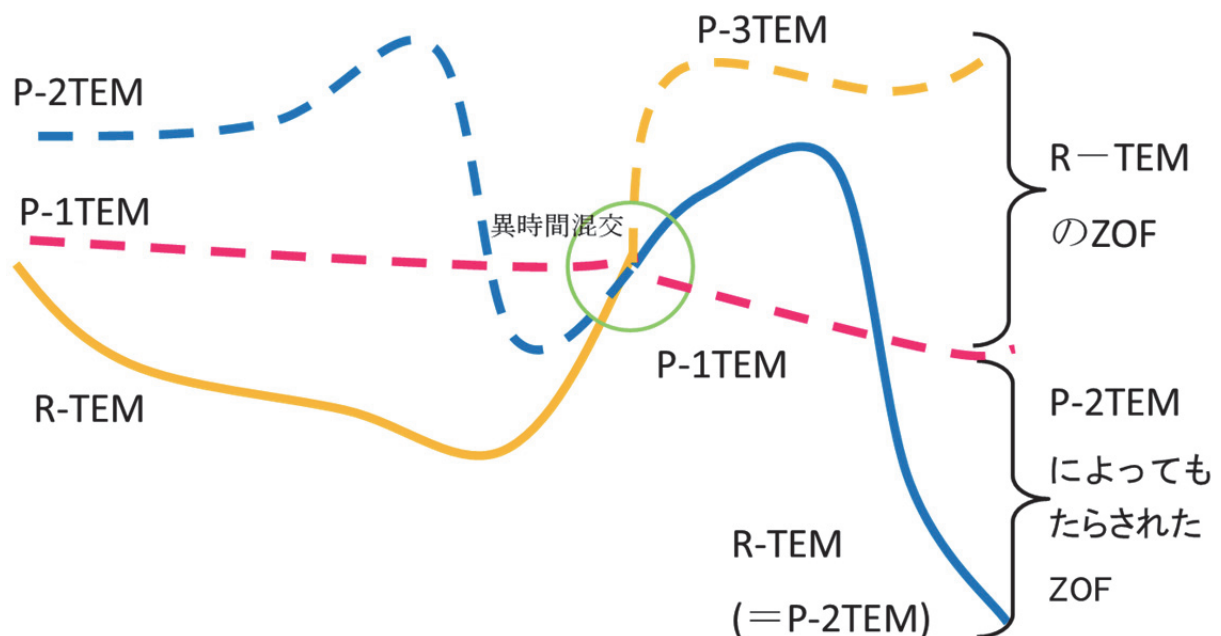


図2 反実仮想的自己と現実世界の自己による異時間混交

以上のことから、(1) 人の発達プロセスにおける分岐点の経験が、現実世界において都合の悪い状況を生むと、その分岐点で「自分が選択・判断しなかったもう一つ人生の径路（反実仮想的自己、P-1TEM、P-2TEM）」を生み出し、それを想起することで『後悔』の感情が生起し、強まること。

さらに、(2) この『後悔』が生み出す反実仮想的自己の声と現実世界の声が異時間混交することによって、そこに新たな等至点が発現し歴史発達のゾーンを拡大させること。以上、2 点を明らかにした。

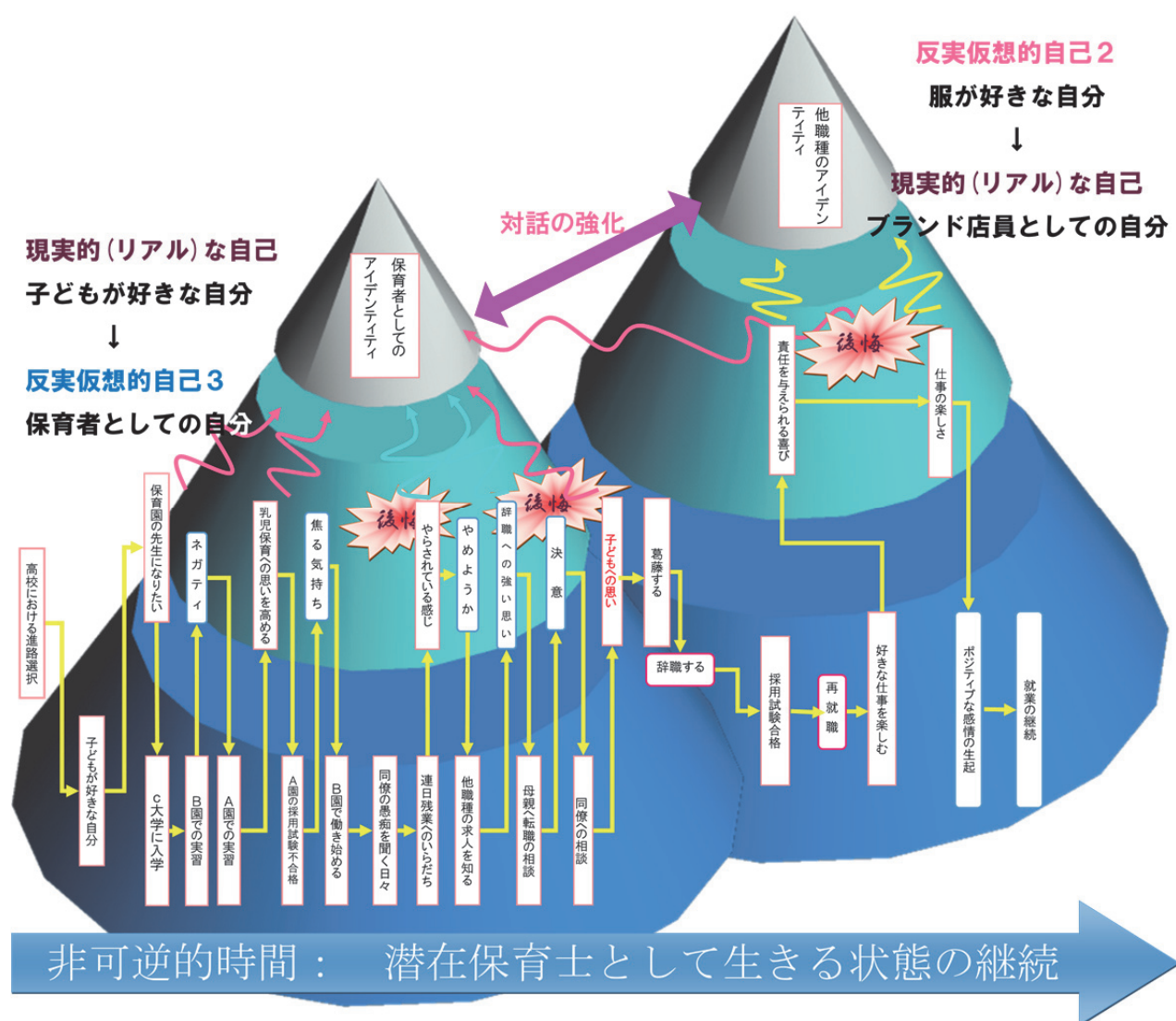


図3 TLMG と山脈的自己モデル

4. 総合考察

前章では、TEM によって明らかにされた後悔の感情によって、反実仮想的自己が生起し、さらにそれを実現しようとする時間的展望を強めることで新たな発達のゾーンを拡大していることを明ら

かにした。そこで、本章ではこれらの知見をもとに、3つの反実仮想的自己が自己形成に与える影響について、発生の三層モデル(TLMG)と山脈的自己モデルを用いて検討を行った。

4.1 散歩に対する保育者の多様な思い

TMLGによる分析の結果(図3参照)、「後悔」が生じることによって、その後悔の要因が促進記号となって保育者としてのアイデンティティに対して、負の影響を与えることが示された。そして、次第に現実の自己である「保育者である自分」と反実仮想であった「他職種で働く自分」の間での対話関係が強化されるなかで、次第に「他職種で働く自分としてのアイデンティティ」が構成されていたことが示された。最終的には、現実と反実仮想が入れ替わり、その後も対話が継続された為に反実仮想的自己3が生成されることが明らかにされた。そして、この反実仮想的自己3によって、保育者としてのアイデンティティが薄まり、他職種での職業的なアイデンティティがより強化され、潜在保育士となっていたことが示された。

5. 展望と課題

本研究では、保育士が潜在化していくプロセスをTEMで、他職種において職業的なアイデンティティを形成し、より潜在化を強めていくプロセスを2つのTMLGによる山脈的自己モデルで示した。そして、これらのモデルによって、後悔という感情が過去の自らの経験を分岐点として立ち上げていることを明らかにした。さらに、分岐点での自らの選択とは異なる反実仮想的自己へのイメージを強め、現実の世界の自己と入れ替わることで、保育者アイデンティティが薄まり、潜在化が強まっていくことが示唆された。

今後の研究の展望としては、他者との相互作用が潜在保育士の自己形成にどのように影響を与えているのか、その作用の実相について対話的自己を用いて明らかにすることを目指す。

また、今回の研究では、研究協力者が4名であったため、潜在化プロセスについて類型化するまでには至らなかった。今後、さらに研究協力者を増やして、潜在化プロセスの多様な径路についてさらに明らかにしていきたい。

6. 引用文献

[1] 池本美香:保育士不足を考える:幼児期の教育・保育の提供を担う人材供給の在り方,JRIレビュー,28(9),(2015)

[2] サトウタツヤ:発達の多様性を記述する新しい心理学:方法論としての複線径路等至性モデル,立命館人間科学研究, 25, 65-75, (2006).
 [3] 劉楠:潜在保育士の就業意向は、どのように高められるか:年代と就業の有無を中心に,山形大学紀要 社会科学, 47(1), 19-33, (2016)
 [4] Valsiner, J. (2001). Comparative study of human cultural development. Madrid : Fundacion Infancia y Aprendizaje, (2001)
 [5] 安田裕子:TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開, 誠信書房, (2012)